

第21回日本気象学会夏期特別セミナー (2009年度気象海洋夏の学校) の報告

2009年度気象海洋夏の学校実行委員会*

1. はじめに

第21回日本気象学会夏期特別セミナー(2009年度気象海洋夏の学校)は、2009年7月30日(木)から8月1日(土)までの2泊3日で、東京都八王子市の八王子セミナーハウスにおいて、東京大学が主幹となって開催されました。この夏の学校は、全国の若手研究者がそれぞれの研究について議論を交わし視野を広げ、親睦を深めることを目的に毎年行われている行事です。内容は招待講演、学生による口頭発表およびポスター発表、並びに懇親会となっています。今回は、同大学の日本海洋学会若手会と協力し、初の気象海洋合同による夏の学校となりました。そのため、全国から約150名の参加がありました。気象と海洋それぞれの分野の方々と3日間を通じて交流することができ、非常に有意義なものとなりました。

2. 招待講演

今回は気象と海洋それぞれの分野から、計5名の方に「研究する」とはどういうことか?という哲学から最新の研究まで、幅広いテーマで講演していただきました。参加者の中には学部生も多く、今後の進路の参考になるような機会であったと思います。以下が講演者および要旨となります。

○廣田 勇(京都大学 名誉教授)

「志学の精神」

廣田先生には、研究の話ではなく研究者・科学者と

してどうあるべきかをご自身の経験を交えながら講演していただきました。年齢を例としたオイラー的な視点とラグランジュ的な視点、自身の研究を出版することの重要性、論文の共著者に関する話や論文の引用回数半減期など、多岐にわたり話して頂きました。哲学的な内容で、大気海洋関係なくすべての学生が興味を持ったのではないかと思います。学会などでは伺うことができないようなお話を聴くことができ、大変刺激になりました。

○日比谷紀之(東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 教授)

「海洋の中・深層における鉛直乱流拡散強度の全球分布に関する理論的・観測的研究」

日比谷先生には、海洋大循環を駆動するのに重要な役割を担うと考えられている鉛直拡散係数について、理論・観測両面から最先端の研究を講演していただきました。鉛直拡散係数に対するこれまでの考え方から、観測により現在明らかになりつつある空間分布およびそれに関する理論まで、先生自ら実演した動画を交えて分かりやすく説明されていました。理論的な内容が中心でしたが、専門外の学生にとっても非常に興味を持って聴ける内容でした。

○江守正多(国立環境研究所地球環境研究センター 温暖化リスク評価研究室 室長)

「地球温暖化をどう伝えるか」

江守先生には、研究者の立場になる私たちが一般の人々に研究内容や成果を説明しなければならない場合に心がけるべき点について地球温暖化を例に講演していただきました。IPCC報告書で将来予測に用いられているモデル結果を正しく説明すると長くなり、一般の方にはわかりにくくなることを、誤解されずに最小限の言葉でうまく伝える方法について、ご自身の体験を交えて話されていました。研究分野を問わない内

* 代表: 木下武也(気象)・森岡優志(海洋)(東京大学大学院理学系研究科)

aos.wakate2009@gmail.com

URL <http://www-aos.eps.s.u-tokyo.ac.jp/~wakate/>

© 2010 日本気象学会

容で質問も多く、全員が興味をもって聴けたことと思います。

○植松光夫（東京大学海洋研究所 海洋科学国際共同センター 教授）

「空と海の間物質循環」

植松先生には、海洋に起因するエアロゾルの変化とそのことが気候に及ぼす影響に始まり、地球上の環境を形成するシステムの複雑さ、そしてそれに対して科学者はどのように関わるべきかについて講演していただきました。また数多くのスライドと共に、ご自身が関わっているプロジェクト

の紹介もあり、大変分かりやすかったです。気さくな話し方で、学生からの質問が多く、エアロゾルの理解がより深まったことと思います。

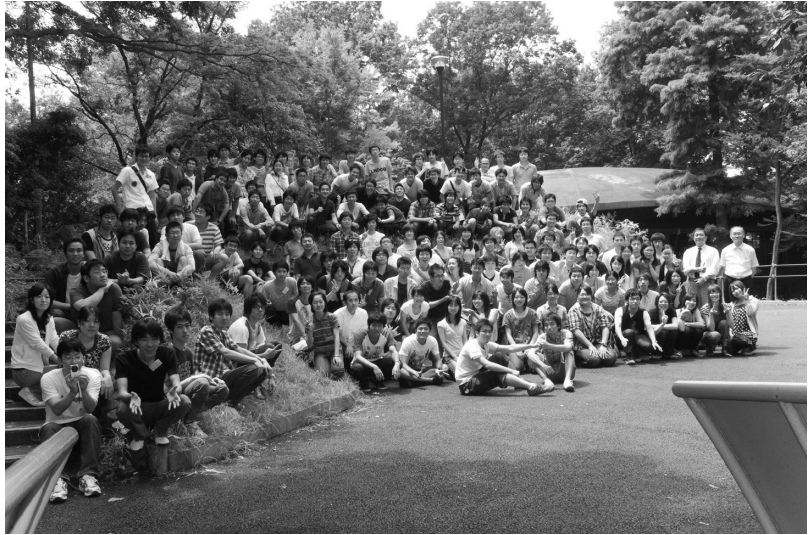
○近藤 豊（東京大学 先端科学技術研究センター 教授）

「エアロゾルの気候影響研究の最前線」

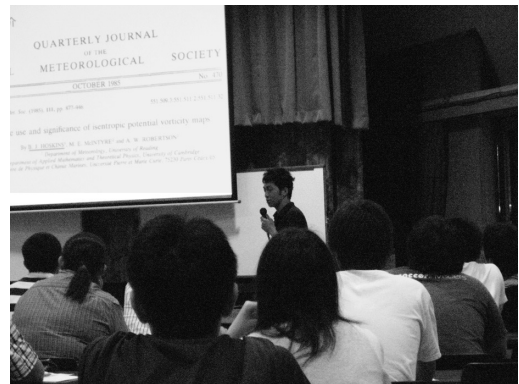
近藤先生には、航空機観測から得られたデータによるエアロゾルの気候影響研究について講演していただきました。他地域に比べ東アジアでは、エアロゾルの影響を強く受けた雲が存在すると考えられており、そのような雲の存在を観測によって初めて明らかにしました。聴講している学生のほとんどは観測経験が少なく、データ解析や数値モデルで研究を行っている学生が比較的多かったため、近藤先生も最初は驚いた様子でしたが、それを踏まえた上で講演内容を分かりやすく、観測の重要性和その面白さについて話していただきました。

3. 一般講演

夏の学校2日目の午後には、参加者自身が自分の研究成果を発表する一般講演を行いました。今回の発表件数は、口頭発表5件、ポスター発表9件と例年よりも少数でしたが、発表時間を長く取ったことで、それぞれの研究内容の理解が進み、常に質問が飛び交っており、次のイベント開始時間まで議論が絶えませんでした。



第1図 集合写真（最終日）。



第2図 学生発表の様子。

4. 企画

若手研究者どうしの親睦を深めるために、夜には懇親会を行いました。毎年恒例の研究室紹介では、参加校が多くそれぞれ1分と制限を設けたため、発表時間が少ないとのコメントもありましたが、個性ある大変趣向を凝らした紹介に、参加して下さった廣田先生を含め、大いに盛り上がりました。また、2日目に行った班別対抗クイズ大会では、自分の班を探すための自己紹介タイムから始まり、多くの方と交流する機会を持つことが出来たと思います。懇親会後も、研究や、気象と海洋の学生交流のこれからについて、夜遅くまで議論が続きました。

5. おわりに

この度は、夏の学校にご参加いただいた皆様、また企画・運営にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。そして、本年度も日本気象学会から資金を援助していただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2010年の夏の学校は京都大学へ引き継ぐこととなります。次回の夏の学校も、これから入ってくる新たな若手研究員を含め、運営側と参加者お互いにとって実りある機会になりますこと、研究者どうしの親睦が深まりますことを期待しております。